

# 大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）  
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第 66 号

大阪市史料調査会（編集）  
大阪市立中央図書館内 Tel.06-6539-3333

## 『新修大阪市史 史料編』第8巻を刊行しました！

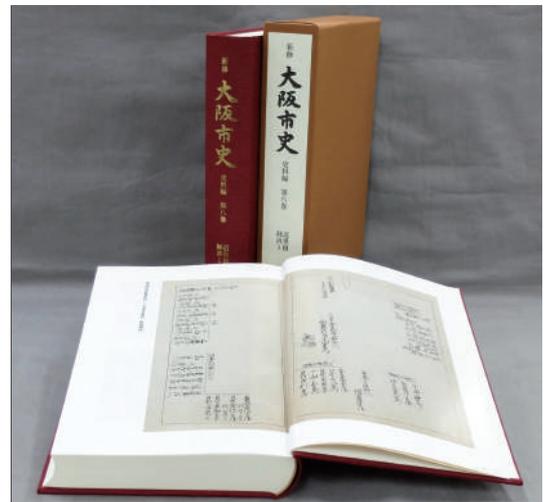
### 大坂町奉行阿部遠江守の意見書 — 大阪市史、115年越しの「宿題」 —

大阪市史編纂所と大阪市史料調査会では、今回、『新修大阪市史 史料編』第8巻「近世Ⅲ経済1」を刊行しました（写真）。ここでは、本書の宣伝を兼ねて、その第1章に掲載した、大坂町奉行阿部遠江守（正蔵）の意見書についてご紹介したいと思います。

実は、明治44年（1911）に刊行された『大阪市史』第5巻にも、阿部遠江守の意見書が載っています。江戸時代後期の天保13年（1842）3月に、阿部が大坂経済の再建策をまとめたもので、「提出されなかった意見書」として知られているものです。当時、大坂の経済は不振に陥っていました。金融面ではまだ力を保っていたものの、米・塩・炭・薪・木綿を始め、これまで各地から届いていた商品が送られてこなくなり、届く商品の量が少ないために値段も上がって、人々は物価高に苦しんでいたのです。阿部はその対策を意見書にまとめ、江戸の老中に提出しようとした。意見書では、「株仲間」の重要性が力説されています。江戸時代の商人は、業種ごとに株仲間という一種の同業者団体を作っていたのですが、阿部はその株仲間がないと商品の流通ルートが乱れ、商品不足がさらに進むと考えていたからです。

しかし、この意見書が提出されることはありませんでした。意見書が書きあがった直後の天保13年3月13日、株仲間こそが物価高の原因であると考えた江戸幕府が、大坂の株仲間にも解散を命じたためです。老中水野越前守（忠邦）が強硬に進めたといわれる、天保の改革の株仲間解散令の一環でした。株仲間こそ重要とする阿部の意見書は、水野の考えとは正反対。江戸幕府という武士の組織で、上役である老中に真っ向から反対する訳にもいかず、阿部は意見書を出すのを止めています。「提出されなかった意見書」といわれる所以です。

明治44年の『大阪市史』に載っているのは、この「提出されなかった意見書」ですが、その後、阿部には「提出された意見書」もあったことが知られるようになりました。国立国会図書館が所蔵する「市中取締類集」という史料の中に、天保13年4月晦日に江戸に届いたという、阿部の意見書が書き写されていたからです。同年3月に意見書の提出を止めた阿部は、翌4月に書き直した意見書を江戸に送っていたのです。そこでは、酒造業・輸入品販売業・両替業など、株仲間が無くては困る業種をいくつも挙げて、彼らには表向きだけ株仲間を解散したことにさせて、団体としての活動を続けさ



『新修大阪市史 史料編』第8巻「近世Ⅲ経済1」

せてはどうかと提案しています。老中に反対する内容を和らげつつ、業種を限ってでも何とか株仲間を残そうとする、阿部の強い意志が読み取れます。翌天保14年2月24日、阿部は大坂町奉行の職を離れました。江戸の町奉行への転任を命ぜられたためですが、役職上は昇進になるので、意見書のせいで立場が悪くなった訳ではないようです。

さて、今から115年前の明治44年、「提出されなかった意見書」を載せた大阪市史としては、「提出された意見書」の方も、ぜひ掲載しなければなりません。阿部遠江守の考えと行動を理解するには、両方の意見書を読む必要があるからです。大阪市史にとって、「提出された意見書」を載せることは、いわば115年越しの「宿題」だった訳です。今回刊行した『新修大阪市史 史料編』第8巻には、阿部の「提出された意見書」を全文掲載しました。他にも、江戸時代の大坂経済の実態に迫ることのできる史料を、数多く載せておりますので、ぜひご覧になってみてください。(吉川 潤)

## 「おろしや国」の旗とロシア海軍旗

嘉永7年(1854)9月16日紀州加太浦沖合に現れた「異国船」が翌17日天保山沖合に現れました。これはロシア海軍中将・プチャーチンが乗ったロシア海軍の軍艦ディアナ号であり、彼らは上陸用のバツテイラ(小型ボート)に乗り換え大坂へ上陸を試み、幕府と交渉しようとしています。これに対し幕府は大坂での交渉を拒否し、大坂城代及び町奉行に命じて現地対応させます。幕府から大坂での交渉を拒否され、下田へ廻るよう促されたディアナ号は、10月3日に下田へ向け大坂を離れるまで、天保山沖に碇泊していました。町奉行配下の川奉行及び老中配下の大坂船手は、市中の川船であった上荷船茶船に命じ安治川等で船を並べてバリケードを築きバツテイラの大坂市中への侵入を阻止します。また、大坂に蔵屋敷を持つ諸藩や大坂城加番等から動員した兵を天保山及び周辺に配備し警固に当たらせます。

大阪市史編纂所には、この時のロシア船の姿を描いた絵があります(左図)。また、この絵の下には「詞書」があります。

(詞書)

右船頭立候者	長	三拾間余	石火矢六挺
名ヲポチャチント	巾	二拾間余	大筒四拾六挺
申ヨシ	人数	三百五拾人計	

おろしや国

左之通日本之  
假名二而書有之



「ロシア船図」

(浅田家文書 大阪市史編纂所所蔵)

詞書によれば傍線部のように旗竿も「日本之假名」で「おろしや国」と書かれているとあります。船図にある三本のマストのうち右側のマストに掲揚されている旗のことで、この船がロシア船であることを日本人に伝えようとしているものと思われます。一方、左側のマストに掲揚されている「×」の旗があります。これは、白地に青い×が描かれる「聖アンドレイ旗」と

呼ばれるロシア海軍の旗で、船乗りの守護聖人アンドレイにちなんだものです。白地に青い×印ですからまことに単純な旗デザインであり、一度見たら忘れないものですが、これを初めて見る日本人にはまったくどこの船かわからないでしょう。紀州加太浦沖合に現れた時に「異国船」と報告されていた船は天保山沖合に来航した時にはロシア船だと認知されています。これはおそらく船に掲揚されていた旗に「日本之仮名」で「おろしや国」と書かれていたことによると思われます。

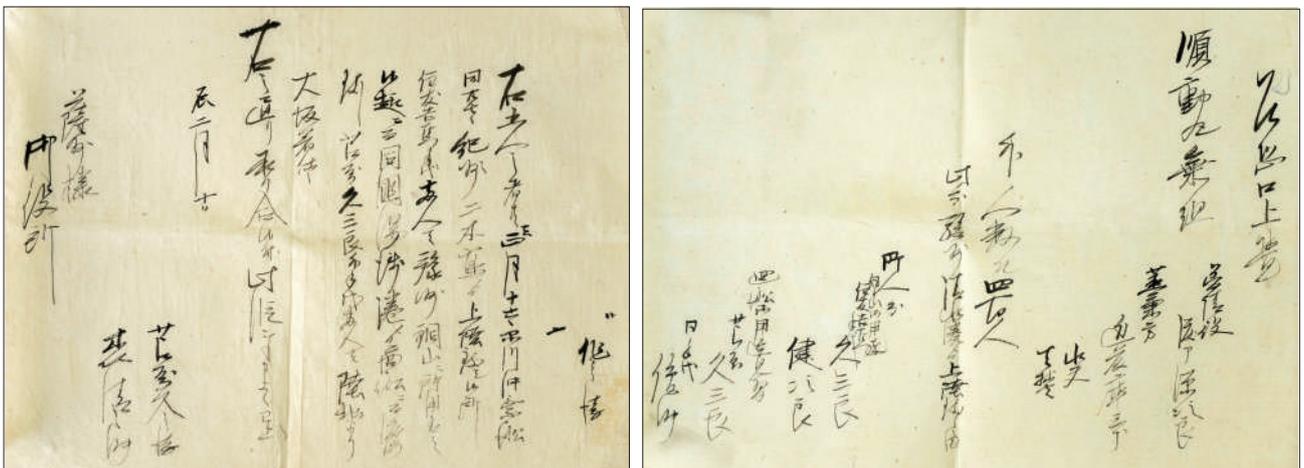
ロシア船は本件の数年前から日本に訪れていますが、まずはロシアの船であることを認知させるために工夫をしたのだと思われます。当時の外国船来航は強引に開国を迫る圧力的なものだという印象が強いですが、その中でもこうした細やかな気遣いが見られていたことがわかる興味深い事例だと思います。(尾崎 安啓)

## 順動丸の便乗者

幕末維新期に活躍した江戸幕府の海軍(軍艦方・海軍方)の艦船に、順動丸という西洋船がありました。もとは英国商船でしたが、文久2年(1862)に幕府が購入し、おもに物資や人員を移送する運送船として用いられました。排水量405t。備砲は1、2門と軽武装。蒸気機関で動く外輪船です。

順動丸は大坂と関わりがあります。文久3年4月、将軍徳川家茂は同艦に乗船し、大阪湾とその周辺の海防状況を勝海舟と共に視察しました。慶応4年(1868)正月の鳥羽・伏見の戦いの時期には大阪湾に派遣され、旧幕府海軍による兵庫港封鎖に参加。徳川慶喜の大坂城逃亡後は同城御金蔵の正金を紀州まで移送し、旧幕府軍将兵を江戸の品川まで運びました。

さてここに、辰(戊辰年=慶応4年)2月10日付の苦屋久兵衛の口上覚があります(写真)。苦屋は幕府の廻船御用達を務めた大坂の廻船業者です。薩摩藩に提出された同口上によると、久兵衛の息子久三郎が順動丸に便乗して帰坂したとあります。久三郎は当時、廻船御用達見習として江戸に滞在し



「乍恐口上覚」(苦屋・飯田家文書 飯田友子氏所蔵)

ていました。

便乗者(町人分)は苦屋久三郎と手代2名、住友吉左衛門の手代2名の合計5名です。便乗することができたのは、苦屋や住友が幕府と関係の深い商人だったからでしょう(苦屋は廻船御用達、住友は銅山御用達)。彼らを乗せた順動丸は同年正月16日、品川沖を出港。紀州方面に向かいます。途中、駿河国清水湊(現静岡県静岡市)に寄港。同27日、紀伊国二木島(現三重県熊野市)に寄港。便乗者はここで下船し、苦屋久三郎は陸路大坂に向かい、住友手代らは湯浅港(現和歌山県湯浅町・広川町)から商船に乗り換え、伊豫国の銅山(有名な別子銅山でしょう)に向かいました。

興味深いのは順動丸に関わる記載です。同艦乗組として、普請役渡部源次郎(幕府役人)、蒸気方の近藤庫三郎(艦長)・水夫(船員)・火焚(機関要員)が挙げられています。さらに注目すべきは、船員

以外に約 400 人が乗船しており、彼らは清水湊より上陸したとの記述です。この 400 人は旧幕府方の兵員と考えられます。当時、清水湊に近い駿府城には旧幕府方の軍勢が集結中でした。

久兵衛の口上は政治的に非常に微妙な時期に作成されました。正月 4 日、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍が新政府軍に敗北。同 6 日夜、徳川慶喜は大坂城を脱出し、苦屋の本拠でもある大坂は新政府軍の支配下に入ります。翌 2 月、東征軍が本格的に組織され、同 12 日、慶喜は抗戦を諦め江戸城を出ます。口上の作成は 2 月 10 日。世の中がどう転ぶのかわからない中、苦屋の息子は旧幕府海軍の船に便乗し、親はその経緯を新政府側に届け出る。激動期を生きる人々の苦労が偲べれます。

(中村 直人)

## 編纂所からのお知らせ

### ○刊行物

『新修大阪市史 史料編』第 8 巻「近世Ⅲ経済 1」 (本体価格 5,500 円 送料実費) 令和 8 年 1 月刊行

第 1 章 大坂経済の動向	第 4 章 市場
第 2 章 海運	第 1 節 天満青物市場
第 1 節 大坂―江戸間の海運と流通	第 2 節 靱三町塩魚問屋と雑喉場生魚問屋
第 2 節 廻船御用達苦屋久兵衛	第 3 節 京橋川魚問屋
第 3 章 貿易	第 5 章 通信と運送
第 1 節 唐薬問屋の薬種取引と砂糖の統制	第 1 節 飛脚
第 2 節 大坂銅座と俵物の集荷	第 2 節 上荷船・茶船
第 3 節 近世後期の大阪糸割符仲間と唐物商人	第 3 節 べか車

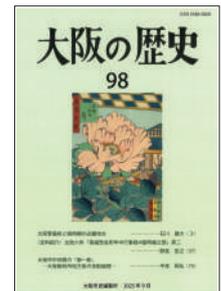
『大阪の歴史』第 98 号 (本体価格 700 円 送料実費) 令和 7 年 9 月刊行

大阪警備府と戦時期の近畿地方……………石川 雄大  
〈史料紹介〉文政六年「南組惣会所年中行事録并臨時雑之部」其二…………野高 宏之  
大坂市中仲間の「御一新」―大坂裁判所地方掛の支配論理……………平良 聡弘 他

[大阪市史史料第 97 輯]

『質商旧記』 (本体価格 1,800 円 送料実費) 令和 7 年 8 月刊行

大坂三郷で結成された質屋株仲間の定書や名簿などが記された「質商旧記」、全 2 冊を抄録。



### 刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は、大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会(大阪市立中央図書館 3 階・TEL06-6539-3333)までお問い合わせください。

取り扱い書店— ジュンク堂書店(大阪本店・難波店)  
紀伊國屋書店(梅田本店 ※『大阪の歴史』最新刊のみ)

#### ■「編纂所だより」は、年 2 回発行しています。

さまざまな歴史の話題や日々の活動などを、みなさんにわかりやすくお届けする、ニュースレターです。

大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています。大阪市立中央図書館(3 階大阪コーナー)及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

#### ■大阪市史編纂所では、ホームページを開設しています。

催し物や刊行物のご紹介をはじめ今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問にお答えする「みんなの質問」など、市域の歴史に関する情報を発信しています。

「編纂所だより」もカラー版で閲覧・ダウンロードしていただけます。ぜひ、ご覧ください!

[https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page\\_id=871](https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871) または「大阪市史」で検索してください。

(令和 8 年 3 月発行)